

取材日：2018年1月23日



糖尿病



熊本医療圏

合併症のすべてに対応する専門医と医療スタッフがチームとして機能する糖尿病専門病院。

Point of View

- ① 複数の糖尿病専門医に加え循環器科や眼科専門医が常勤し、透析部門も備えて糖尿病とその合併症すべてに対応
- ② 糖尿病療養指導士や治験コーディネーターなどの資格を有する多職種の医療スタッフたちもチームとして診療や患者教育、臨床試験で協働
- ③ 臨床試験や治験を積極的に行い、エビデンスにもとづいた糖尿病医療を提供し地域の患者たちの信頼を得る

医療法人社団陣内会
陣内病院
理事長／院長

陣内 秀昭先生

医療法人社団陣内会
陣内病院糖尿病治療センター
薬剤部主任／治験室主任

吉田 陽先生

医療法人社団陣内会
陣内病院糖尿病治療センター
看護部門総師長

川口 はるみ氏

半世紀前から糖尿病に対する理解を求め、専門診療を提供

陣内病院の公式ウェブサイトには「糖尿病のある豊かな人生」との印象的な病院理念が掲げられている。そこには1977年の開設から40年余、一貫して糖尿病とその患者たちに向

き合ってきた専門医療機関の自負が感じられた。

「一人ひとりの患者さんそれぞれの人生のありようを最大限に尊重し、糖尿病という疾病ではなく、糖尿病を抱えた人を診ていこうとする志、そして、たとえ糖尿病であっても豊かな人生を送れることを診療におい

て患者さんとともに実証していく決意は、実は、病院開設よりさらに遡った60年ほど前に生まれたのです」（陣内秀昭先生。以下、陣内先生）

こう語るのは、同院2代目の院長を務める陣内先生だ。

「かつて熊本大学には体質医学研究所と称する機関があり、私の父、陣



左から陣内先生、吉田先生、川口氏

【資料1】

陣内病院における治験・臨床試験の実績

- ・陣内病院における治験：2003年より院内治験事務局設置、院内CRCが担当し開始
- ・実施数：計88 試験
 - 糖尿病治療薬治験：69試験
(内服治療薬：36 試験、注射薬治験：33 試験)
 - 糖尿病性腎症・降圧薬治験：5試験
 - 神経因性疼痛薬治験：8試験
 - 抗肥満症薬治験：6試験
- ・院内で治験倫理委員会を実施
- ・糖尿病治療薬治験の対象となる患者は2,800 例／月

内富男（現・陣内病院会長）は、その糖尿病グループで研究をしていました。当時の糖尿病医療は、半日かけて血糖値を測るといったレベルでした。また、世間では『糖尿病はぜいたく病』と言われ、診療を受けないで病気を悪化させ、合併症によって辛い経過をたどる患者さんも多くいました。

もちろんインスリン治療はありましたが、『インスリンを打つようになったら人生はおしまい』、『怖い治療だ』などの誤解や偏見を持つ人も少なくなく、自己注射も認められていませんでした」（陣内先生）

陣内富男先生は、そうした患者の状況を目の当たりにしながら、「糖尿病であっても適切な治療を受ければ、健康に長く生きられることを社会に広めたい」との思いを強くしていったのだという。やがて日本糖尿病協会が設立され、糖尿病患者の支援に前進の兆しが見え始めた中、陣内富男先生は開業に踏み切った。「ビルの2階の小さな『陣内内科』では、開業時から患者に適切な治療を提供するとともに、糖尿病を患者さんにも社会にも、誤解なく理解してもらおうと尽力しました。社会的

療スタッフの育成など、現在では当たり前と思われることを1980年代初頭から行った。「初代院長は将来を見据えて、現在の糖尿病診療の原型をつくったと言えるでしょう」（陣内先生）

画像診断や治験参加によって
合併症の心血管疾患予防を

同院は1983年に有床診療所から病床数36床の『陣内病院』となり、神経内科部門、眼科部門、人工透析部門を新設。合併症治療を含めた総合的な糖尿病の診療体制を確立した。

そして1997年、陣内先生が着任すると、虚血性心疾患等、糖尿病性大血管障害の予防を目的とした診療の強化を図る。当時、画像診断技術が急速に進歩したこともあり、CTやMRIを導入し、糖尿病早期から積極的に動脈硬化の診断に取り組んだ。「当時、糖尿病性大血管障害の予防効果が示唆されていた薬剤は、インスリン抵抗性改善剤と抗血小板剤でした。ただ、自分たちの行っている治療がどの程度有効なのかは、まだ明らかでなく、早急なエビデンスづくりの必要性を感じていました。そ

な活動も含めた糖尿病医療をめざしたのです」（陣内先生）

だからこそ、開業2年後に有床診療所として移転新築して以降、次々と新しい試みに取り組んだのだろう。たとえば教育入院や運動療法、専門的な知識や技術を有する医

こで、熊本大学医学部循環器内科からお声がけいただいたのを契機に、医師主導型の臨床試験を始めたのです」（陣内先生）

同院は治験を含めた臨床試験を実施できる体制の構築に着手する。「一から仕組みづくりに取り組みました。院内LANを設備して全情報のデジタルデータ化を進め、また、まだ治験コーディネーター（CRC）もほとんどいない時代でしたから、CRCが担うべき業務は薬剤師などに手伝ってもらい、徐々に体制を整えていきました」（陣内先生）

結果、2000年、院内治験審査委員会（IRB）を立ち上げ、2003年には院内治験事務局を設置、院内CRCが担当して治験の開始にまでこぎつけた。同院の臨床試験と治験は、以来、現在まで継続して行われている（【資料1】）。

定期受診3,300名の同院で
心血管関連死は0.1%

同院での臨床試験や治験にたずさわって、薬剤部と治験室の主任を務める薬剤師の吉田先生が話す。

「日本糖尿病学会の死因解析からも心血管疾患に対する早期発見と早期介入の効果は明白で、当院の早い時期からの心血管疾患予防への取り組みは、確かな成果を上げています。当院に継続的に受診する糖尿病患者は約3,300名ですが、2017年は治療中断者1名を含みますが、心血管関連死は通院患者の0.1%と年々減少しています」（吉田先生）

「最近、ようやく全国的にも糖尿病患者の心血管関連死は減少傾向にあります。糖尿病が重症化すればするほど、自覚症状を感じにくくなるため、定期的な画像診断等の検査によって心血管疾患を早期に発見する

ことが重要です。

各種の臨床試験や治験では、定期的な画像診断等の検査を行いますから、心血管疾患の早期発見や治療介入につながります。つまり、臨床試験や治験を積み重ねてきたおかげで心血管関連死を0.1%まで減少できたのだと思います」(陣内先生)

糖尿病専門病院を支えてきた 地域からの信頼とチーム医療

糖尿病に特化した専門病院は、全国を見渡しても稀である。複数の専門医と専門知識を有する医療スタッフをそろえ、入院施設を備えたうえで、糖尿病だけを診ていく道は決して容易ではない。同院が、40年以上にわたって糖尿病に特化して続けてこられたのは、立ち止まることなくベストの医療を追求し、患者からの信頼を積み上げてきたからだろう。「患者さんからの信頼はすべてにおけるベースで、確固たるエビデンスにもとづいた医療によってしか獲得できません。同時に、患者さんとの信頼関係があってこそ、臨床試験や治験を続けられ、エビデンスをつくってもいけるのです」(陣内先生)

もうひとつ、同院が際立っているのは、チーム医療の充実だと言える。糖尿病のさまざまな合併症に対応するため、糖尿病専門医以外に循環器や眼科の専門医がおり、さらには病態栄養や肥満症、禁煙を専門的に診られる医師まで在籍。医療スタッフは看護師、薬剤師、管理栄養士、臨床検査技師、診療放射線技師、臨床工学技士と多職種をそろ

え、うち16名は日本糖尿病療養指導士(CDEJ)の資格取得者。治験業務は4名のスタッフがCRCとして働いている。同院では、医師と医療スタッフが、一丸となって糖尿病に立ち向かう体制が確立されているのだ(【資料2】)。

「患者数が多く、医師の診療時間がどうしても限られてしまうので、患者さんたちの生活の詳細な情報を得るのは医療スタッフの務めです。それぞれのスタッフが、何気ない会話などを通して患者さんについて知り得た情報を集約し、医師に伝えるようにしています」(吉田先生)

看護部門総師長の川口氏も続けて語る。

「薬物療法でも、患者さんの生活情報は非常に大切です。たとえば、勤務時間や食事時間などの生活リズムに沿って服薬アドヒアランスを高めるようにする、あるいは家族構成や年齢によって血糖値測定やインスリン投与のためのデバイスを考慮する

といったことを、多職種の医療スタッフ一人ひとりが心がけています。

病院全体がチームだとの考えが浸透しているのも、職種間、医療スタッフ間の距離は非常に近く、互いに知り得た情報の交換や共有は、特にカンファレンスなどの機会を持たなくても、日常的にごく自然に行われています」(川口氏)

「医療スタッフたちには、院内での定期的な勉強会だけでなく、院外の学会や研修会、勉強会にも積極的に参加するようすすめており、今では医療スタッフたちの主体的、自発的な活動も非常に充実しています。糖尿病医療のあるべき姿をすべての医療スタッフがよく理解しているからこそ、最適な医療を提供できているのです」(陣内先生)

各種チームから成る委員会が 患者啓発や教育入院で活躍

「当院には、多職種の医療スタッフ

【資料2】

陣内病院の職員



毎年、開院記念日には業務に功績のあった職員を表彰している。

5